

末永敏事平和記念館 開館5周年記念

末永敏事資料集



明治20年（1887年）～昭和20年（1945年）

1912年、長崎医専の大正元年卒業アルバムに掲載された末永敏事
（長崎大学附属図書館医学分館提供）

― 目 次 ―

末永敏事の親族と友人井村兼治氏	1
医療関係者職業能力申告令の条文（1938年、昭和13年勅令）	2
特高月報 昭和13年10月分（逮捕当時の所属、職業、年齢及び逮捕に至る言動）	3
敏事の博士号取得を知らせる大島原新聞（昭和2年2月1日付） 見出し	4
敏事の博士号取得を知らせる大島原新聞（昭和2年2月1日付） 本文	5
内村鑑三の戦争廃止論が掲載された萬朝報（1903年、明治36年6月30日付）	6
内村鑑三より敏事へ宛てた1916年（大正5年）7月15日付書簡	6
末永敏事と同時期に活動した人々（内村門下） 矢内原、藤沢、浅見の各氏	7
米国留学中に発表された敏事の論文 1920年代（大正年間）	8
米国シンシナティにて撮影された末永敏事	8
米国シンシナティにて撮影された末永敏事	9
末永敏事の医学論文一覧	10
内村鑑三より敏事へ宛てた書簡	11
末永敏事より教友蒲池 信氏へ宛てた手紙	12
末永敏事がフレンド派「友」第104号へ寄稿した詩「山吹の花」	13
末永敏事が隣家へ贈った書籍にあった謎の一文	14
末永敏事が同郷の学友？へ送ったはがき（明治42年（1909年）1月21日付）	15
末永医院の登記に関する記録	16
静江夫人縁の自由学園 THE GAKUEN WEEKLYに掲載されたDr. Suenaga の英文原稿	17
静江夫人の活躍を伝える雑誌記事	18
静江夫人の活躍を伝える雑誌記事と当時の自由学園明日館	19
末永道伯・敏事親子の遺品等	20
付録 北有馬村今福周辺図	21
末永敏事の略歴と内外の動き（年表）	22

1934年（昭和 9年）1月1日付学園新聞



中島静江 1900年（明治33年）～1989年（平成元年）

範子 1929年（昭和 4年）～2011年（平成23年）

敏事の元夫人中島静江のフランス留学を伝える学園新聞
へ掲載された母娘写真。範子ちゃんとは敏事の娘さん



末永敏事と妻の静江（親族提供）

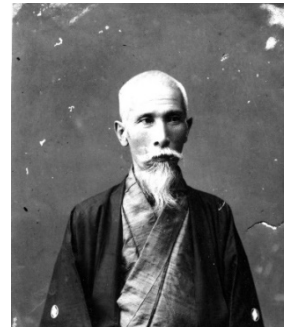
1927年（昭和2年）結婚、昭和8年離婚



敏事の友人井村兼治翁（前列右）と正治氏一家



敏事の母 チヨ



敏事の父

2代目 末永道伯



敏事の元夫人、静江さんの父
中嶋滋太郎

（元日本郵船専務取締役、
元日本海事協会理事）



1940年代の壮年期の兼治氏



述懐

敏事の友人井村兼治氏のご子息正治氏による
敏事と井村家に関する貴重な記録
内容については、記念館にて展示中
（井村兼治氏に関する資料は井村修治氏提供）

[illegible][illegible]

特高月報 昭和十三年十月分 〈今般の資料〉

宗教運動の状況

一四四

微するも基督教界に最も斯る行爲者を多く見つゝある所なるが、本月中も其の主要なる要注意言(行)動別記の通にして右の外圍なる同教育信者中には、強いて我が國體を基督教に結合せしめんと試み、徒らに我國史古典を紛淆するが如き妄説を唱ふる者等あるを以て、此の種行動に對しては引續き注意取締の要あり。

基督教教師、信者の要注意言(行)動

縣府	實 動 者	言 動 要 旨	措 置
兵庫	日本メソヂスト教 信者 小林 榮子	今世間では「國民精神總動員」(波私國體)など云つて大變亂起してあるが果してそれによつて何ものが得られるか疑はしい。……大阪の小学校に於て先生が未だ純真な兒童に對してあなたを信仰して居るキリストと日本の天皇陛下とを對等と見做す時、どちから味方するかと云ふ質問を發したといふことである。實に認識不足も甚だし。……今吾々の周囲の人は「日本精神」「大和魂」など云つて居るが、果してそれが本當の正義であり愛であるか？ 吾々の信奉する基督教精神こそ絕對的正義であり本當の愛である。云々	
茨城	白十字會恩賜養農園 醫師 末永敏事 當五十二年	警察廳關係者職業能力の申告に關し茨城縣知事に對し次の如き通告を發せり。 「警察廳關係者職業能力申告の義務は、警察廳關係者として入所の除隊兵及兵士家族に必要の書類作成の如き事項に當りて平素所信の自身の立場を明白に致すべきを感じ茲に拙者が反戦主義者なる事及軍務を拒絶する旨通告申し上げます。」 右東茨城縣知事に對し次の如き通告を發せり。 「……神の精神を以て人と因て居る日本の基督教徒の兵士職に將校に其の地位を利用して月々の機會に食教師と協力して支那人と共に基督教の精神に急列して支那人を保護することを奨励する……若し個人日本人の基督教徒が軍務に入つた後、に彼に儀式及協力の道徳を教へんが爲に、日本基督教聯合會が彼に手を伸ばすことが許されるならば偉大なものです……」	所請署に於て目下取締中
長野	在大阪市 米人宣教師 某		

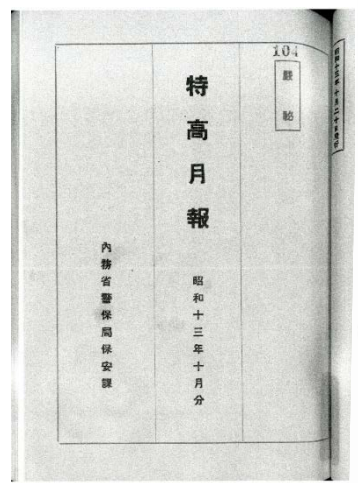
二、宗教犯罪其の他不正行爲の取締状況

本月中に於ける宗教犯罪の檢舉及其他宗教々師等の宗教乃至信仰を利用する不正行爲の取締状況概ね次の如し。

宗教事犯檢舉概表(十月中著報せるもの)

白十字會保養農園
醫師 末松敏事
當五二年

(注) 末松敏事とあるが
次号より末永に
直されている
「拙者が反戦主義者なる事
及軍務を拒絶する旨
通告申し上げます」



茨城県鹿島郡に造られた白十字會恩賜保養農園の全景
(白十字會100年史から) 末永敏事は1938年

第三種郵便物認可
毎月一日十五日二回發行

頁二十紙本					
號三第年三第					
發行所	發行兼編輯印刷人	料持別五割増	廣告金五十錢	價定紙本	部十五錢
大島原新聞社 長崎縣下都賀郡馬場町六十二番地	市川治		一ヶ月三圓五十錢	一ヶ月三圓五十錢	一ヶ月三圓五十錢

我が南高半島は夙にその出身者に醫學博士三宅秀工學博士原口要の兩氏を有してゐた。

にもかゝらず其後は長らく無く數年前中島醫學博士を出したやうであるが最近に至つて、池田、中島、末永、三宅など續々と博士を出すことになつた。

これは南高の學界にとつて頗る好き刺戟を與へ、實に歡ぶべき現象である。

獨り醫學のみに限らず、各方面の博士をもつと多く出したものである。

何れ博士にならぬから偉くないといふのではないが、博士になる程勉強することは確かにいゝ事と思ふからその方面の人々に博士になる事をすすめても悪いことではあるまい。

一體自己の住居する所が世間一般に名高くなることはその土地にとつて有形無形に非常な利益になるものである。

尤も娘尸軍の本場としての有名なところと感心しないが、

天下の公園としての温泉岳
山紫水明の地としての島原
繭の名産地としての南高半島

それ等は悉く我々民をどれ程有利に導いてゐるか知れない。

が現はれて來たやうにも思はれるから、この好期を逸せず後進者は奮勵努力出生の地をして有名ならしむることに熱心して戴きたい。

北有馬村は由來獎學の地、ために財的の疲弊を一層甚だしからしめ

てゐるが、此頃同時に二人の博士を出し得た事は確かにこれを償ひ得て餘りあることと思ふ。

財といふ觀念も必要ではあるが之を偏重して守錢奴となり了せては

到底一人の博士も出来るものでない。知識の光は金銭の光より強く且つ永遠である。

[illegible]

[illegible]

Downloaded from ascelibrary.org by University of California, San Diego on 06/01/15. Copyright ASCE, For All Rights Reserved, No part of this document may be reproduced, stored in a retrieval system, or transmitted, in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording, or by any information storage or retrieval system, without permission in writing from ASCE.

1

1

100

自己宣傳が必要

プロバガンダと片假名に書く言葉が英國から日本に歸化してから

如何に立派な新理想も主義もそれが世人の口の中に唱へられ出してから社會の普遍的實在、言ひかへたでは實際的の利用或は實現されるまでは大凡十年はかかる」と言はれてゐる。

背選たつてゐた。國民が驚つてその要求を絶叫する様になつてもうかれこれ十一年以上にならうか、今漸その實現の機に臨まうとしてゐる水平社運動でもやつたその効果が今頃現れ出して來て

居る。
所で本筋のプロバガンダ即ち宣傳のことだがこれは問題が抽象的の問題だけにさうはつきり人の意識にのぼらないから、何々何々何々何々何々何々何々の口のにぼつたものだ、それが今日では殆んど注意

これ等自己宣傳の最も露骨な標本である
が、殺人としてはそんな露骨な自己宣傳は出来ない、うつかりしようものなら忽ち社會の指彈の的となる、だから自己宣傳は大きい必要はあるがゆへに眞實にしたいもの

を案がなくなつたが、それだけ普遍的に實際化したと言ふ可きであらう。宣傳とか廣告とか言ふのが商賣人丈けの營業政策の手段だと考へられてゐたのは、う遠の過去のことだ。此の頃では商人は言はずもな政治策でも新聞廣告でも醫者の言はなければならぬ。圓滑或いは間接に行ひ、して効果を收め得る人を世間では處世術がうまいと賞める。

所で自己宣傳の方法、それは各人各様の時と所に依つて又必要に應じて案出する可きであつて決して

でも會社でも凡そあらゆる方面に於いて自己宣傳の必要が大いに在るのだ。

三度乞はして草紙を出づ」とか言ふ皇朝が支那の古い物語の中に在る言葉も古のさうした考へである。

今では時代錯誤だと思ふ。

才士賢人は自ら世これを認む、自ら宮へ傳ふる、荷ふ士の源よしとせざる所——なんて道學先生が麗者かいた言を言つたつて攝政王の時代は兎に角多士濟々の今日でも

汽車や自動車でもましろツこしい
と言はれる今日、悠々と野に遊賢
を求めてゐる暇なぞあつたもので
ない。

今日では人々は己の全才を、全
能力を充分に發揮しつゝと務めて
ゐる。有爲なる今、今時世と云ふ

は何時になつても世に認められす
まゐ。

才士は才士賢人は賢人程々々出
でゝ金々強々自己を主張し自己を
宣傳せなければなるまゐ。

これから益々自己宣傳の必要は増
へて行く。(梁士彦)

一、行方不明（失踪）

二月一日號

主要目次

- | | | | | |
|--------|--------|------------|--------------|-----|
| △博士の歳年 | 喜ぶべき現象 | △現代の社會は | 自己宣傳が必要 | (一) |
| | | △南高の政界はどうか | 遠選挙の豫想 | (二) |
| △詩苑 | △おやつ | △洞江村の現在及將來 | 一村は再び不幸の彼方へ | (三) |
| | | △安中村の海 | 松島夫人の死 | (四) |
| | | △枕木を踏いて | 千々石から小濱まで | (五) |
| | | △一家一村の詩 | △山北主筆の遺出 | (六) |
| | | △校長と邑 | △東有家、大庄校、古岡校 | (七) |
| | | △小説に現れたる | 戀愛種々相 | (八) |
| | | △森田語 | △森田語 | (九) |
| | | △編輯後記 | | (十) |



全時に二人の博士を
出した北有馬村

金があり過ぎて、土用干をしな
といはねばならぬ

朝あすし暫しばらく郷里きやうりに靜養せいやうの後東京のちとうきやうに

日
◇
◇

切望して置く次第である。

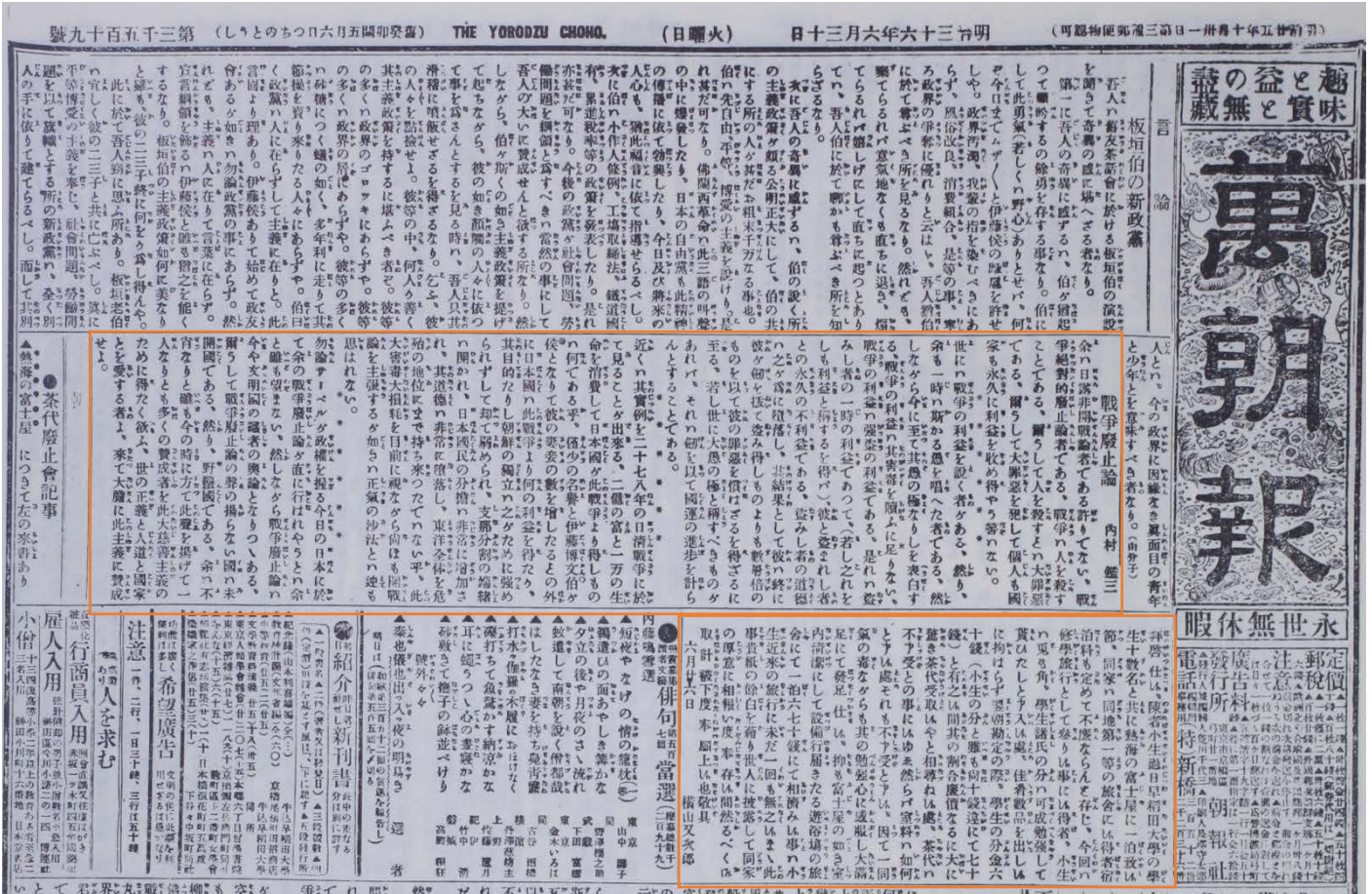
りません」

に「教へる人」としての價值が拔け切つてゐる。

と威張る男が今の世にも居るさうだ

三の「戦争廃止論」が掲載された1903年（明治36年）6月30日付萬朝報（よろずち）

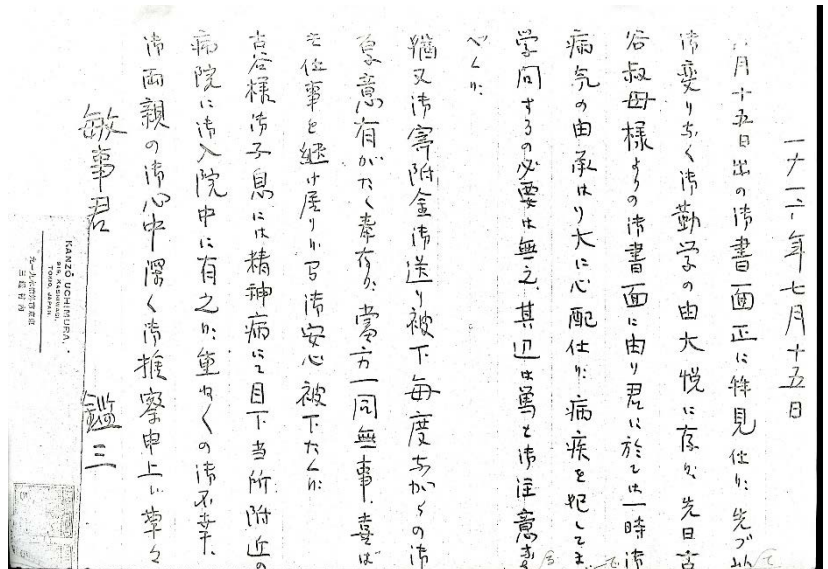
NPO法人今井館教友会提供



NPO法人今井館教友会提供

内村鑑三（1861年文久元年～1930年昭和5年）

無教会主義キリスト教の創始者。敏事の師にあたる。



1916年（大正5年）7月15日付 敏事への書簡

敏事の病気見舞い、寄付金のお礼などが記されている

（注）新聞記事等の文字が小さく、判読し難いものについては

USBやCD等がありますので、申し出があれば用意いたします

敏事と同時期に活動した人達



やないはら ただお
矢内原 忠雄

明治26年(1893)～昭和36年(1961)

NPO法人今井館教友会提供

戦後に東大総長

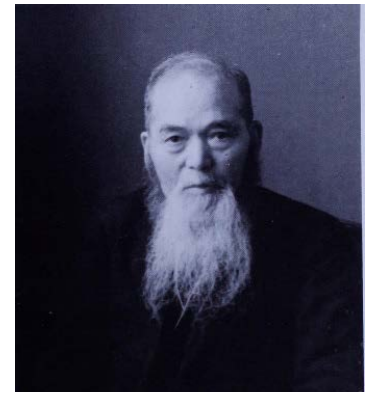


藤沢武義

明治37年(1904)～昭和61年(1986)

NPO法人今井館教友会提供

無教会主義の伝道師



浅見仙作

NPO法人今井館教友会提供

北海道にて農民伝道に携わる

詳細については森永玲氏著『反戦主義者なる事通告申し上げます』を参照くだ

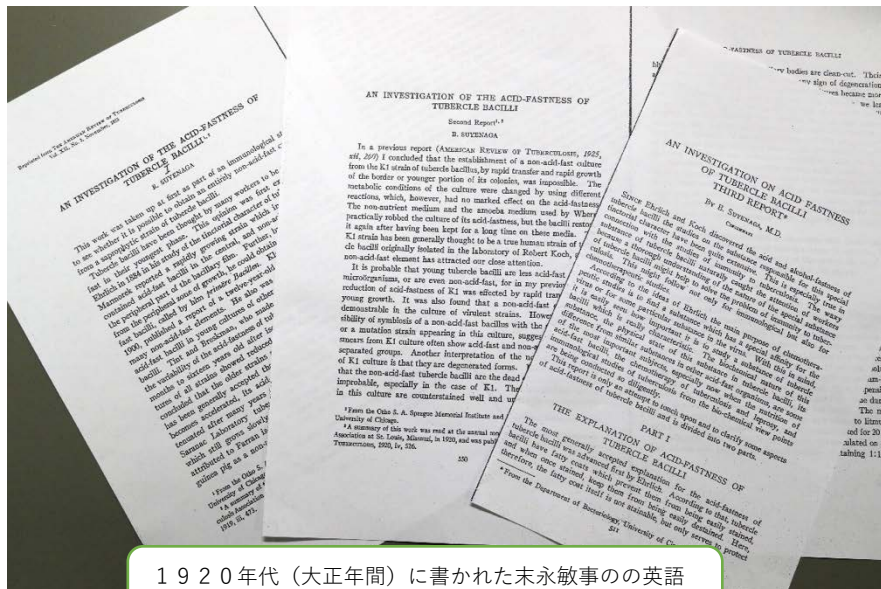


角筈聖書研究会々員 明治36年3月 内村家の前にて

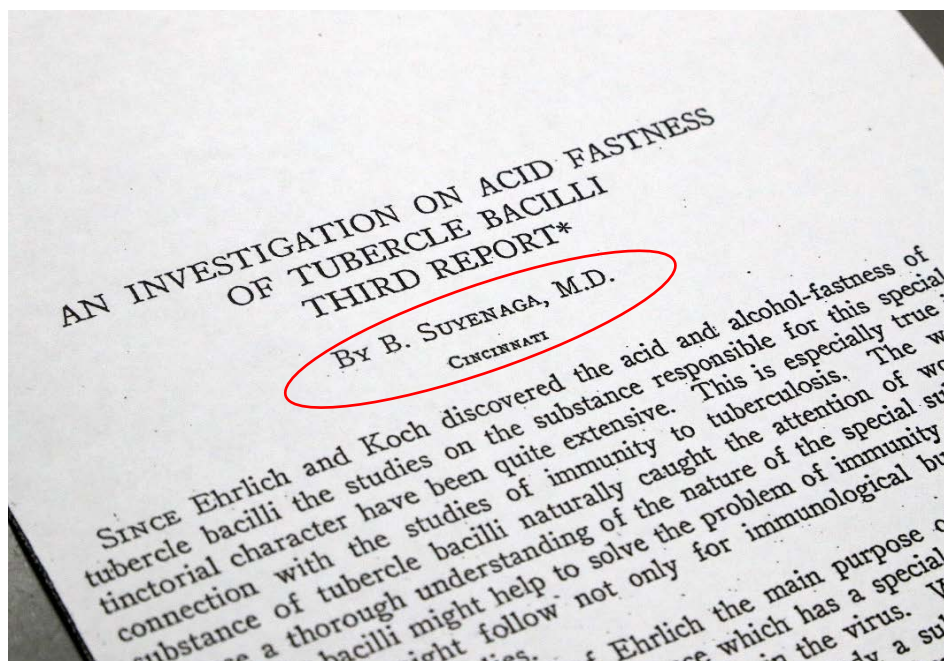
(前列) 左から4人目、黒木耕一、8人目鈴木与平(沢野通太郎)、(前列) 右から、葛巻行孝、一人おいて森本慶三、一人おいて浅野猶三郎、(後列) 左から、若林肇太郎、山岸光宣、山岸壬五、小出満二、大賀一郎、志賀直哉、中央、内村鑑三、同夫人しづ、3人おいて蒲池春江、石橋智信、(後列) 右から、永井久録、倉橋惣三、小山内薫、一人おいて田中龍夫。

敏事の手紙にある「蒲池 信、御内」と関連は今のところ不明

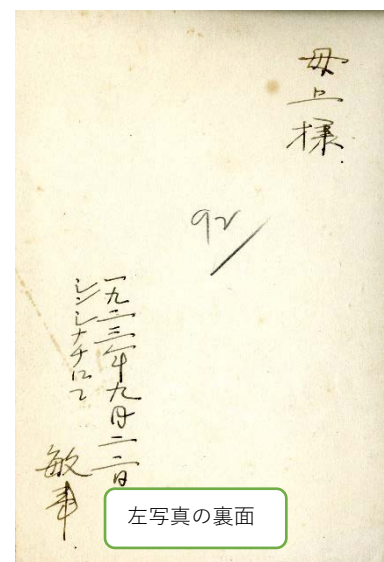
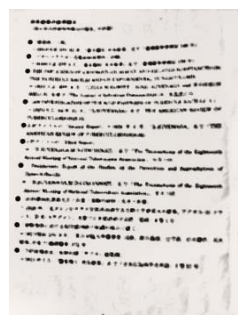
NPO法人今井館教友会提供



1920年代（大正年間）に書かれた末永敏事の英語



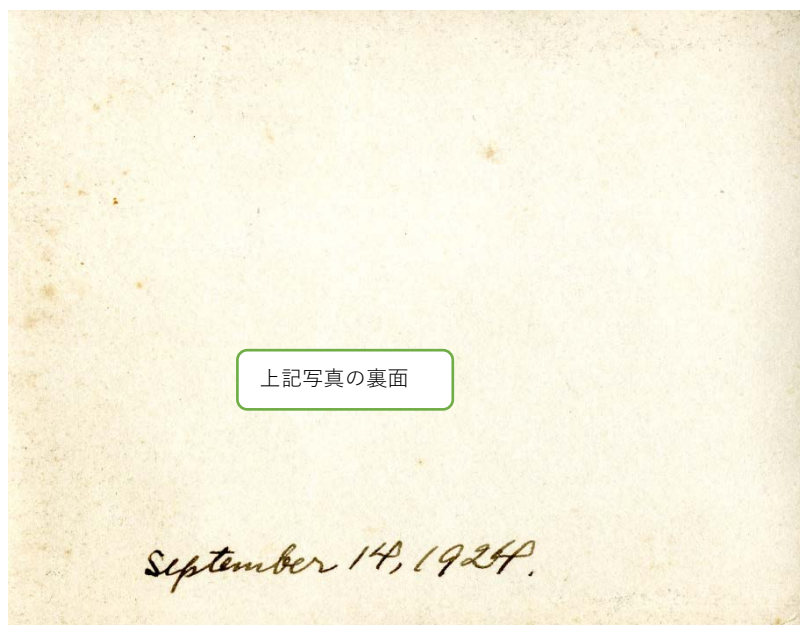
1923年（大正12年）米国シンシナティにて
（七條眞由美さん提供）



左写真の裏面



1924年（大正13年）9月24日 米国シンシナティ（七條眞由美さん提供）
左の人物は不明

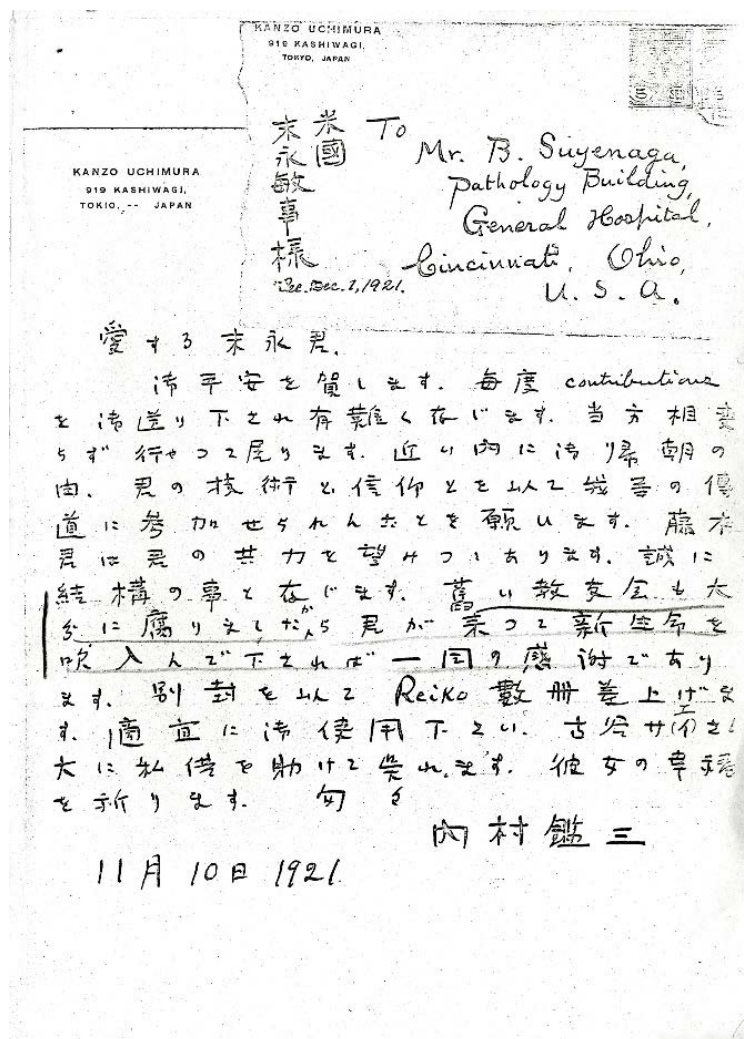


(国立国会図書館所蔵分の複写、年代順)

- 「萎黄病ノ二例」
=1914 (大正3年) 12月、「台北医院 末永敏事」 名で 「台湾医学会雑誌146号」
- 「ビオルコウスキー氏亀結核菌製剤ノ治験」
=1916 (大正5年) 12月、「台北医院 末永敏事」 名で 「台湾医学会雑誌159号」
- 「THE INFLUENCE OF CREOSOTE, GUALACOL AND RELATED SUBSTANCES ON THE TUBERCLE BACILLI AND ON EXPERIMENTAL TUBERCULOSIS」
=1920 (大正9年) 8月、「LYDLA M. DeWITT BINZI SUENAGA and H. GIDEON WELLS」 共著で 「The Journal of Infectious Diseases1920.08」 ※表紙のみ
- 「AN INVESTIGATION OF THE ACID-FASTNESS OF TUBERCLE BACILLI・I」
=1925 (大正14年) 11月、「BINZI SUENAGA」 名で 「THE AMERICAN REVIEW OF TUBERCULOSIS1925.11」
- 上記タイトルの 「Second Report」 =1926年 6月、「B. SUENAGA」 の名で 「THE AMERICAN REVIEW OF TUBERCULOSIS1926.06」
- 上記タイトルの 「Third Report」
= 「B. SUENAGA , M. D. CINCINNATI」 の名で 「The Transactions of the Eighteenth Annual Meeting of National Tuberculosis Association」、年月不明
- 「Preliminary Report of the Studies on the Parasitism and Saprophytism of TubercleBacilli」
= 「B. SUENAGA , M. D. CINCINNATI」 の名で 「The Transactions of the Eighteenth Annual Meeting of National Tuberculosis Association」、年月不明
- 「坑疥＊病性要素欠乏ノ白鼠ノ実験的結核ニ及ボス影響」
=1926年、「北米シンシナティ大学医科細菌学及生物化学教室末永敏事、アグネス・H・グラント、D・Eステグマン」 共著で日本結核病学会誌 「結核」 4巻1号
- 「脊髄後根に於ける副交感神経の組織的検出に就いて」
=1927 (昭和2) 年9月、「東京帝国大学医学部 呉建、新田義雄、辻守昌、白石鎌作、末永敏事」 共著で 「芸備医事」 372号
- 「予防接種直後ノ家族的腸「チフス」感染例」
=1927年7月、「医学博士 末永敏事」 名で「日本伝染病学会雑誌」 1巻10号



1917年（大正6年）1月18日付 内村鑑三から米国シカゴの敏事への



1921年11月10日付 内村鑑三からシンシナティに移った敏事への書簡

「君の技術と信仰とによって我等の伝道に参加せられんことを願います。」と期待をのべている。

山吹の花

末永敏事

日本の春の山吹の花
心の花の山吹の花
昔ながらの山吹の花

嫩葉は先に新春の
希望に満ちて噴き出でぬ。
然して今、汝に顯はるゝ
自然の美！
その有する静謐！
その含む原始の態！

かの文明の狂奔を制する手綱
現代の不安と焦燥とを安定す
るの要素は汝にあるにあらさ
るか！

勝たざれば、穫されば已まぬ
現代精神

堪忍は無事長久の基
怒は敵と思へ
勝つをのみ知り負くるを知
らぬ
身に害來ると教へたる
古人の歩みに劣るかな！

低けれど、小さけれど、
少く人に見られると

汝は疲れし眼、痛める心に
大なる慰籍と深き想とを送る
近代人の大なる遺失物と
云はれたるもの
英國人が今や失ひし心の平
和と嘆かれたるもの
汝にあるにあらざるか、
原始自然の美よ、生命よ、

かの澎湃たる唯物主義のため
に、
かの虚榮と偽りの美のために
今や全く敗落したる
女性の徳も汝に在り、
ベタニアのマリヤ、リア王の
妹娘、

日本の春の女王たる
櫻花の美にもけられじ

斯くより深き所にて
汝に大なる世界あり、
汝に盡きぬ永劫あり、
日本の花の山吹の花
世界の花の山吹の花
一九三五・四・二一・夕稿

由れるものにあらず。我は人
より之を受けず、また教へら
れず、唯イエス、キリストの
默示に由れるなり」と断言し
た「人よりに非ず、人に由る
にも非ず、イエス・キリスト
父なる神に由りて使徒となれ
るパウロ」これ實に彼の抜く
べからざる信念の根柢であつ
た。彼はこの信念に立つて憚
らず「凡ての使徒よりも我は
多く働けり」とまで宣言した
彼は彼の神秘的経験と、キリ
ストとの靈的融合に於て「最
早、我生くるにあらず、キリ
スト・我にありて生くる」と
確信した。我我にあらざる、キ
リスト我に、故に我語るは我
語るにあらず、内なるキリス
ト我にありて語る。かくて彼
は賤しき我に内なる神を見、
内なる神の聲を聞いたのであ
る。この境地に達した彼は何
日何時、どこでイエスがかく
云つたとか云はなかつたとか
は問題ではなかつた。イエス
云ひ給ひけるはを口ぐせにし
てゐた時代にあつて彼は率直
端的に我れ汝らに告ぐと叫ん
だのである。彼はこの絶大な
る内在の權威によつて「汝ら
知らぬか、我らは御使を審く
べきものなるを」とまで極言
してゐる。

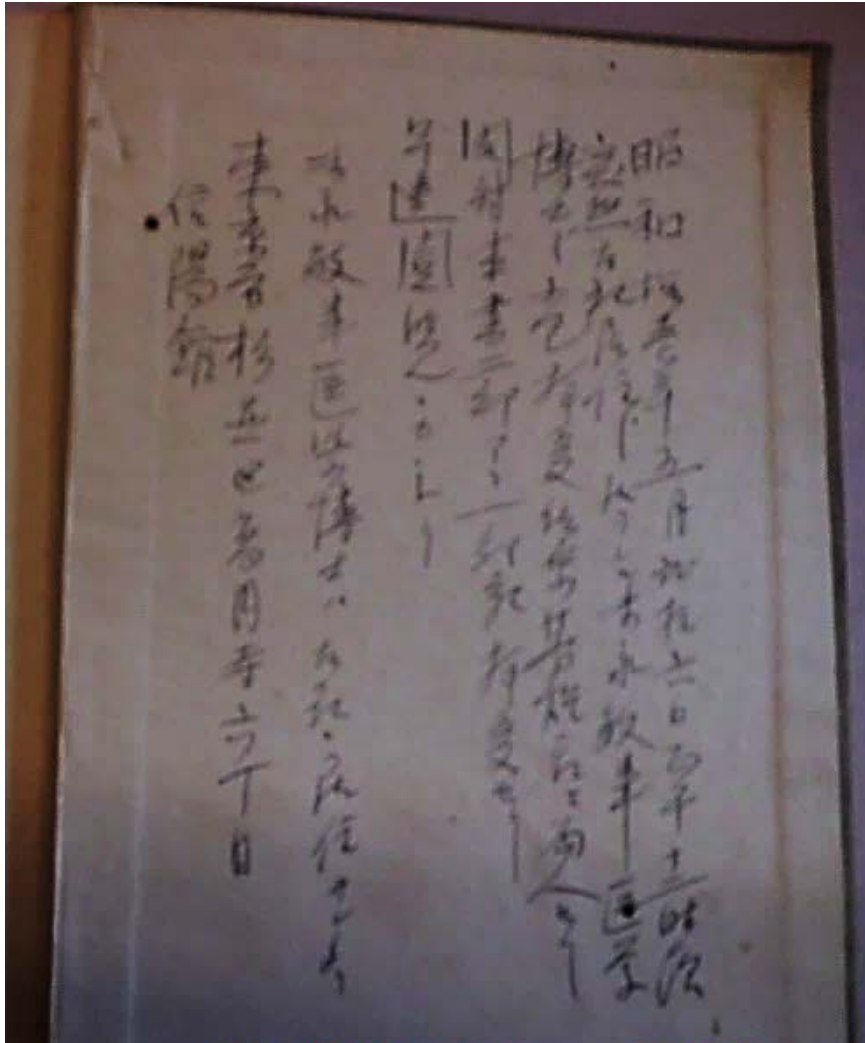
實にこのパウロの信念の上
に影うすれんとした靈的宗教
は確乎として再び力強く喚び
活されたのである。

この熱烈な確信はやがて初
代キリスト教を覆ふの觀をさ
へ現じ出し、終に人々はパウ
ロ流、たゞパウロの信仰、言
説を通じて信仰を考へ、パウ
ロを通してイエスを考へると
いふやうなことにさへなつた
またしてもパウロが教權にま
でまつりあけられ、パウロ崇
拜がはじまらうとした。精神
生命の奧義に參するは達人、
凡俗はたゞ外の形にのみすが
らうとする、これはあはれむ
べき人間の相である。

ひよつとみると何んとなく
キリスト教には山が二つあつ
て、イエスとパウロ、福音書
に散見するイエスの教訓と書
簡に流れるパウロの信仰など
いふ問題が起つて來るのであ
る。どつちが根本であるか、
どちらによつてどちらを解釋
すべきかなど氣の小さい神經
質な小人信徒はまよひ出すの
である。これらはすべて宗教
の本義を未だ悟らぬ輩である
のみに心得る輩に外ならない。
(未完)

午後二時頃、坂路を登り訪
めた臺地に展開された秘境。桃
子の里とはなほしも昔ふべき
か。最初右なる農園を訪へば
主人と覺しき五十格好の弱さう
ではあるが、何處となく氣品あ
る方が、小さな家から出て懇懇
に迎へる。夫人が娘に命じて、
葡萄波の御馳走をしてくれて、
娘は丈高な瘦型で、一見西洋人
らしい二十前後と思はるゝ美し
い容姿。山奥に住むには信じし
位。主人と云へ、娘と云へ、由
緒あるらしい山の一家。人里離
れて住むといふ名門の末裔のこ
となども思はれて……無銀
の懐しさを覺えしめられる。之
は自分が訪れ先を詳にしなかつ
た爲で、直ぐ疑問は解けた。裏
れたる同胞の爲に、少年感化院
を此の秘境御船村に建て、彼等
より嘆き愛の父と仰がれる主人
兼崎氏は、昔て牧人として過さ
れし善良なる基督教者。數名の青
少年が、果樹園や、モルモット
養等の畜産に懸命に勞作して居
るのを見てくれた。

續いて、左手の西宮蓮元氏の
經營するカナン園、新しき村
を見學する。之は前者より規模
は大きく、六町位ある由。桃梅
の外に葡萄、苺、竹の仔、栗、
柿等の果樹、兎、雞、家鴨、蜜
蜂、山羊等の畜産。悉く理想的
に行はれて居り、我らの求むる
自給自足が如實に、目のあたり
實施されて居るのである。而
も此の園が全くキリストの宗教
的雰囲気包まれ、十數名の働
人が、A氏の家族と一團となつ
て、食し勞し平和な生活を營んで



(井村泰成氏提供)

末永敏事医院隣家 井村家ご子息 壽彦氏へ敏事より贈られた書籍の表紙裏側へ記された一文

昭和拾壹年五月**六日**十二時*
 *****末永敏事医学
 博士*****

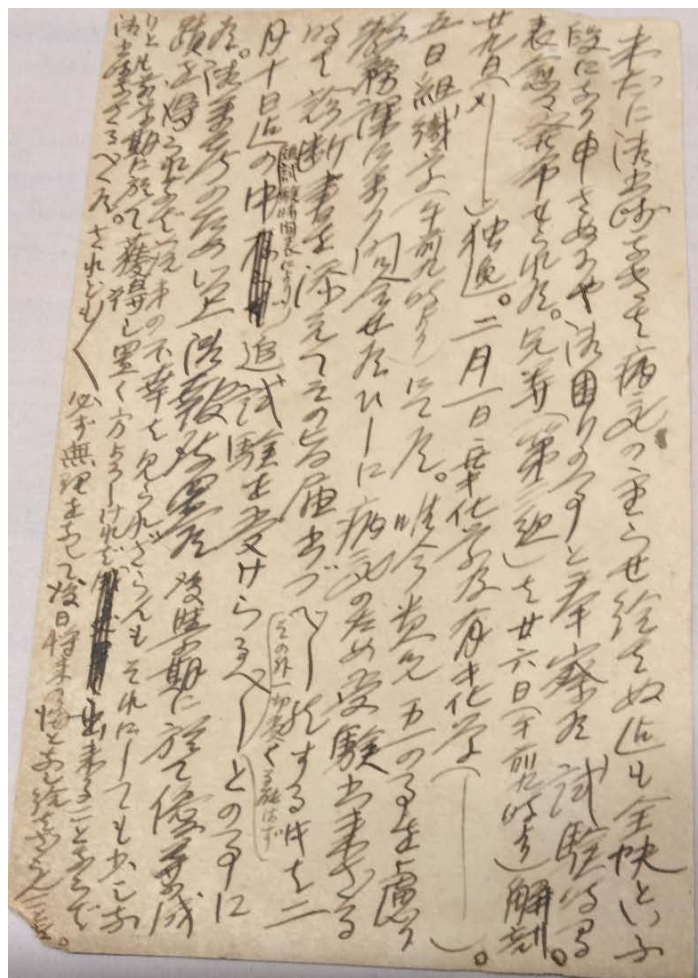
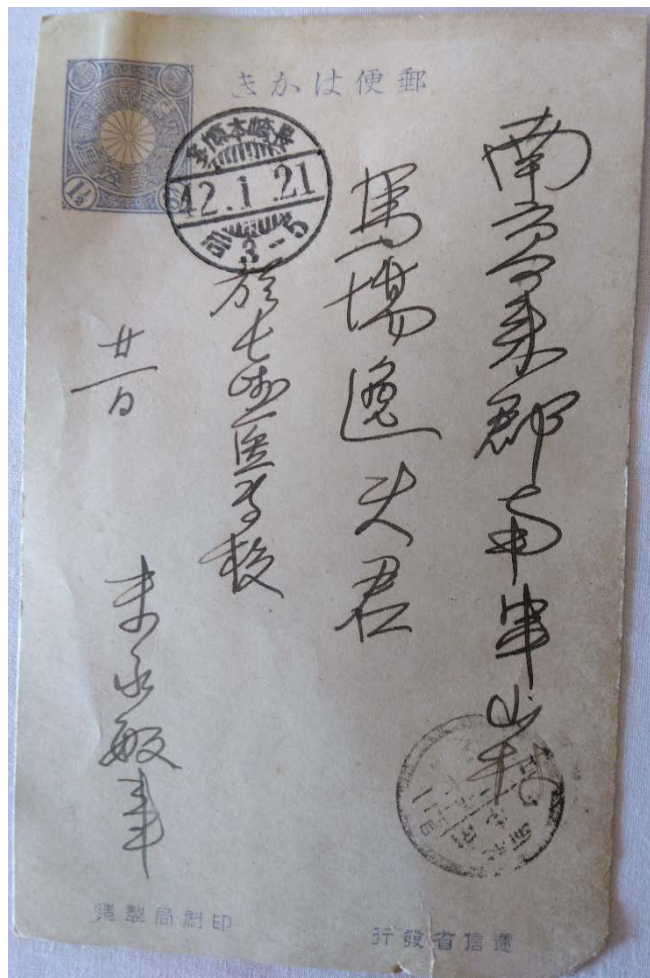
 末永敏事医学博士*****
 東京市杉並区高円寺6丁目
 信陽館

上記枠内の如く読み取れるも、詳細については不明、更なる解読作業が必要です。誰が何のために記したかも不明で、末永敏事名の後に医学博士とあること、及びその筆跡より敏事本人ではないと考えられる。

東京の住所の読み方は、ほぼ間違いないと思われますが、ほかの箇所については定かではありません。教友蒲池 信氏の住所も東京市杉並区であることから関連がある可能性があるのかもしれませんが。

何方か解読なされた方があればご一報いただけますと幸いです。

新たな発見に繋がる可能性があります。



未だに御出崎なきは病気の重らせ給わぬ迄も、全快といふ段になり申さぬにや御困りの事と奉察候。試験時間表愈々発布せられ候。兄等(第二組)を廿六日(午前九時より)解剖。廿九日(メー……)独逸。二月一日無キ化学及び有キ化学(……)。五日組織学(午前九時より)にて候。唯今貴兄、万一の事を慮り教務課に來たり問い合わせ給ひしに、病氣のため受験出来ざる時は診断書を受けてその旨届出づべし。然する中は二月十日迄の中追試験時間表により追試験を受けらるべし。その他一切受くる能わずとの事にて候。ご参考のため以上御報致置候。後時学期に於いて優等の成績を得られなば、落第の不幸を見られざらんも。それにしても少しなりとも前学期において獲得し置く方よろしければ、出来ることならば御出崎なさるべく候。されどもされども必ず、無理をなして後日将来の悔いとなし給はざらんことを。

明治42年1月21日 (1909年) 付 敏事のはがき

敏事が長崎医專在学中に出したものと思われる。
はがきの消印を最寄りの郵便局にて調べるも
該当する局は現在存在しないとの事であった。

蒲池 信 氏宛の直筆書簡の筆跡と同じで
正に敏事のもの。

左は、それを清書したもの。

THE GAKUEN WEEKLY

Published Every Monday for Private Circulation.

Edited by the Students of the English Section, First Year Higher Course.

No. 14.

Monday, 21st March, 1927.

OUR EXAMINATION

Nowadays we hear the girls saying "examination" here and there in our school. It seems as if they do not understand the true meaning of examinations in our school. The truth is that they are held to examine character, through the studies, and so the students need not face them with much fear. We notice the fear of examinations especially in the 1st year girls of Honkwa. We suppose they have not as yet left the atmosphere of their old private schools where students are examined only in studies.

The other day after the morning service the chairman of our committee made a speech for the 1st year girls. Then Mr. Hani asked one girl what he had told them about our examination the day before. It was as follows: "Our school does not estimate one's scholarship by examination only. Our daily lessons are daily examinations. The examinations are held to find out how much ability did the students get during a certain time. So when students take the examinations they should keep up a fearless attitude and try to show their abilities to the best advantage."

We wish all the girls in our school will gladly attend the examinations after knowing their real meaning.—M. S.

HYGIENE OF THE EYE

We heartily thank Dr. Suenaga for enriching the contents of our Weekly by the following valuable contribution.

We saw recently a Kodak picture of the captain and his two associates of a round-the-world cruiser in the Japan Advertiser. These three persons posed as the three monkeys of the Nikko carving, the 'Mi-zaru', 'Kika-zaru', and the 'Iwa-zaru', each symbolizing the sense of 'Not to see evil', 'Not to hear evil', and 'Not to say evil'. The art and its representation must have appealed very well to them. We, at the land of the said workmanship, must be careful not to forget them. Especially, many of us are in danger of abusing our eyes these days.

The so-called Western civilization is flooding into this meagre, although honourable, land of our birth in sweeping force. Our power of reaction and reproduction are not yet strong enough. The balance is always overwhelmingly for the import. Many sparkling and colourful things are being imported. They are 'delight to the eyes' and they seem 'to make one wise'. Irritated by the changeful tides of the time, our eyes become unstable and curious, enough to get ourselves often thoughtlessly into their companionship.

Few weeks ago, a part of the first year pupils of this school were examined on their health. It was surprising that the most of them showed some weakness or defect in their sight. Our work of the health examination has not progressed so much that we can give the results in a statistical way, but it seems to promise to give an unfavorable report so far as the sight is concerned.

The cause for the abnormality of sight is partly due to heredity or disposition, but it will be rather safe to say it more due to the careless use of the eyes. Such brilliant

colour as red and yellow, and such sparkling light as displayed in the photo-play, usually appearing in modern drama and moving picture are not really pleasing to the true nature of our eyes.

We all must learn better and more to read books and magazines. The good and great books are our best treasure. Yet we should abstain from the cheap magazines and questionable books which appear at the book-store and newspaper advertisement as 'mushrooms after a rain'. Turn our eyes often to the unfathomed azure sky and far horizon on the deep blue ocean. Green and blue colour are the restful to eyes. Let us not read in the darker part of the afternoon, especially such closely printed matter on paper of poor quality as newspaper which very often is made not to be well read but simply to be sold! We must read in as steady, mild and enough light as possible, always with distance of about one foot and two inches between our eyes and the book. Keep also your body straight then.

Thus let us try to hold our own and be discriminate in going to the attractive things. Then we shall be able to keep our eyes which are the light of our bodies so clear that we can see the Highest and many good things on the earth without the aid of such troublesome and often monstrous things as eye glasses.

WHAT WE DID FOR QUAKE SUFFERERS

As soon as the tragic news of the earthquake in Kwansai District was reported, we did the following two things.

I. We sent 50 yen through the Asahi to the poor people who are suffering from the damage of the earthquake. This money was made by us by saving our board at school for three days.

II. We sent telegrams of inquiry to some families who are related to our school and live near the seismic centre. To our great joy, we received replies announcing that all of them were safe.—H. K.

THE ESTIMATE

It is good for ourselves or family or school that we make an estimate for the year. In our school, the second year of the higher course are now drawing up estimates for our school as their graduation work. They ceased their lessons from the 7th inst. and are occupied with their graduation work every day.

It is very difficult, because this work is the first work of the kind ever undertaken in our Gakuen and disbursements made during last year are not accurately recorded. But they are doing their work with all their might, dealing with separately Athletic Section, Music Section, Art Section, Adjustment Section, Library Section, etc.

When this is done it is hoped that there will occur no shortage in our school expenditure and our life will become more economic.—N. A.





さい。

向かって右側が中島静江さん



1922年竣工した頃の自由学園明日館、静江の職場であり、1927年（昭和2年）には
夫だった敏事も教員として在籍していた。



道伯の筆と思われる書が描かれた薬箱

右側の柳行李は敏事の遺品

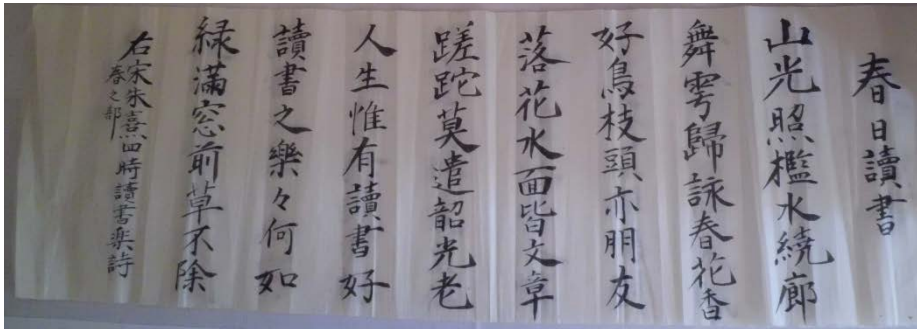


「薬研」 手で輪を転がし、薬草をを粉碎する



薬箱

この箱の中には敏事より井村家ご子息壽彦氏へ贈られた医学書及び書籍等が収められていた。



寺子屋を主宰していた道伯筆による書の手本（春夏秋冬4枚の内、春）



敏事の遺品 木製の行李



“NIPPON YUSEN KAISYA”のラベル

左の行李側面に貼られていたもの。

ラベル中央の社旗「白地に2本の赤帯」、これは現在、日本最大級の海運会社「日本郵船」と同じ。当時、井村家において海外渡航者はなく、従って、敏事が台湾赴任時や米国留学時に使用したものと思われる。

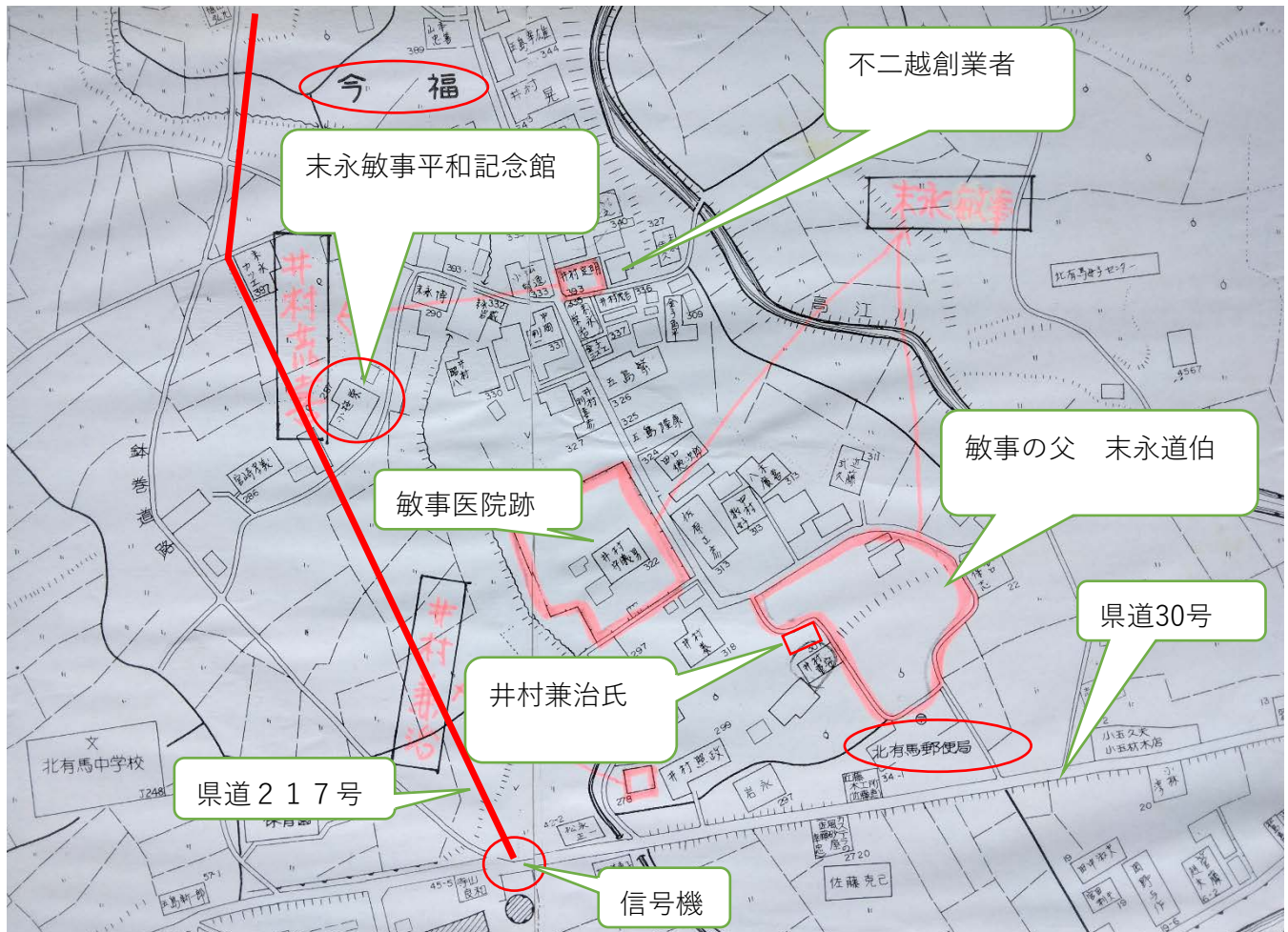
残念ながら船名、Berth No. CABIN No. が空欄であり、年代の特定には至っていません。

以上の品々は敏事が故郷を発つ時懇意にしていた井村家（現 末永敏事平和記念館理事宅）へ託したものであります。以来90年近く保存されていたことは奇跡的であり、この点、敏事の判断は誠に正しかったこととなります。

終わりに

末永敏事平和記念館 開館5周年記念として作成いたしました。

これ等の資料は長崎新聞社・森永玲氏が『反戦主義者なる事通告申し上げます』を執筆されるにあたり集められた資料をご提供いただいたものです。又、遺品等につきましては当記念館理事・井村泰成氏よりご提供頂きました。本紙へ未掲載の資料・遺品等も多くございます。是非一度ご来館下さい。



末永敏事医院跡、末永道伯屋敷跡、井村兼治氏生家、井村荒喜氏（不二越創業者）生家
及び末永敏事平和記念館（小笹 榮家 敷地内）周辺図

道伯屋敷跡地は北有馬郵便局裏側、石垣に囲まれた広大な敷地

道伯屋敷のすぐ隣に敏事の親友井村兼治氏の生家があった。

また、そのすぐ近くに敏事医院跡（森永 玲著『反戦主義者なる事通告申し上げます』参照）

石垣に囲まれた広大な屋敷であるが、現在は所有者が代わっているため、見学時は注意を要する。

末永敏事平和記念館は県道30号と県道217号の交差点信号を217号へ入り約100メートル
右側の小笹家の敷地内。

通常、当記念館は人員の都合上施錠していますが下記の電話にご連絡頂ければ開錠いたします。

連絡先 090-4982-0279 （森永）

年号	年齢	事 項
1887年 明治20年		末永敏事 南高来郡北有馬村今福に生まれる 父 末永道伯 母チヨ
1906年 明治39年	19	青山学院中等部卒業（プロテスタント系新興校）
同 同年		内村鑑三に惹かれキリスト教徒になる
1912年 大正元年	25	長崎医学専門学校卒業（現 長崎大学医学部）
1914年 大正3年	27	台湾総督府 台北医院勤務
1915年 大正4年	28	アメリカ シカゴ大学・シンシナティ大学に留学
1924年 大正13年	37	米国排日移民法案成立
1925年 大正14年	38	アメリカから帰国
同 同年		治安維持法公布
1926年 大正15年	39	内村鑑三の紹介で中島静江と結婚する
1927年 昭和2年	40	京都大学にて医学博士号を取得
同 同年		内村裕之の帰国祝賀会に敏事・静江夫妻出席
1929年 昭和4年	42	長崎県南高来郡北有馬村今福に医院を開業
1930年 昭和5年	43	内村鑑三死去（69才）
1931年 昭和6	44	満州事変勃発
1933年 昭和8年	46	末永敏事・静江離婚 これからの敏事の行動は途絶え
1937年 昭和12年	50	栃木県（東武日光駅前）で末永医院を開業
同 同年		茨城県久慈郡賀美村折橋で末永医院を開業
同 同年		日中戦争（1937～1945）
1938年 昭和13年		茨城県鹿島郡 白十字會保養農園に結核医として入職
同 同年		国家総動員法施行
同 同年		医療関係者職業能力申告令発布
同 同年		茨城県知事宛「反戦主義者なる事通告申し上げます」を発し、逮捕される
1941年 昭和16～17年		東京・今井館（内村）に現れる（54～55才）
1943年 昭和18年	56	親友・井村兼治氏と東京新宿・井村歯科医院にて再開（述懐参照）
1945年 昭和20年	58	太平洋戦争終結
同 同年		末永敏事死亡 墓所（今福・権現山墓地（推定）遺骨所在不明）
2019年 令和元年		特定非営利活動法人末永敏事平和記念館 設立 初代理事長 末永次利

茨城県にて発見された開業
当時の内科診療 医師
末永敏事 医院看板
劣化防止の為に別途保管し





1912年、長崎医専の大正元年卒業アルバムに掲載された長崎医専の全景

右上人物は田代校長

特定非営利活動法人末永敏事平和記念館

理事長 山本昌吾

〒859-2304

長崎県南島原市北有馬町丁287-1

TEL 090-4982-0279

mail kk9ec2fuuc8hs7uwc49q@docomo.ne.jp



NPO法人末永敏事平和記念館全景

令和 5年 5月 1日 発行